

——昨年、WBCムエタイの日本における窓口であるJPMC(ジャパン・プロフェッショナル・ムエタイ・コミッティ)協力の元、WBCムエタイール日本王座決定戦を行ったわけですが、今年はどうな活動を予定されていますか？

橋本 8階級の王者が決まりましたから、これをまず国内で定着させます。ランキング作成まではなかなか難しいんですが、ベルト争いに持つて行きたいんです。それには今年一年かけて各団体に挑戦者決定戦を行っていき、秋くらいに全階級の防衛戦と王座決定戦を行うWBCムエタイのみの大会を計画しています。

斉藤 現在、国崇がWBCムエタイのインターナショナル王座を持っていますよ。彼は日本王座を持っています。彼が必要ないので返上という形になり、7月から8月辺りに王座決定トーナメント一回戦をやります。それと昨年のトーナメントには末広智明君以外はフリーや他団体の選手が入ってきてくれなかったんで、今年はいろんなところに声をかけています。そのWBCムエタイのみの大会では、インターナショナルのタイトルマッチもやるべく、いま海外にオファーをかけています。本来、日本王者には年に1度防衛戦をやるよりも、インターナショナル王座に向かって欲しいんです。次に出来そうな階級が2、3あって、海外にJPMCを通して話をしていたいでいるので、3、5月に出来るかも知れません。去年せっかくいい形が出来て、いい試合も多かったんで、今年は確固たるものにしてさらに上へ上がっていくシステムを作りたいと思っています。

橋本 お互いの興行の中で4人による挑戦者決定トーナメントをやって

WBCムエタイ

斉藤京二

(ニュージャパンキックボクシング連盟理事長)

&

橋本敏彦

(マーシャルアーツ日本キックボクシング連盟理事長)

昨年、NJKFとMAが中心となって(フリー選手も参加)WBCムエタイール日本統一王座決定トーナメントが行われ、8階級で日本チャンピオンが決定した。今年にはインターナショナル王座のタイトルマッチを含め、さらにWBCムエタイの認知度を高めていく方針だ。

秋に合同興行でWBCムエタイの大会を開催 悲願の世界タイトルマッチ実現に秘策あり



秋のWBCムエタイのみの大会でタイトルマッチをやるとするのは、いきなりチャンピオンを決めるトーナメントをやった去年よりはひとつ進歩していると思うんです。

——日本王座を獲ったら、それを守るよりもインターナショナル王座を狙わせるという形ですね。

橋本 そつです。

斉藤 国崇はインターナショナル王座を獲ったので、世界タイトルに挑戦する権利を持っています。タイか他の国で世界タイトルマッチが出来るように働きかけています。昨年11月にWBCムエタイの総会があった時に、私も参加させていただき、JPMCの山根さんを通して各国のプロモーターやWBCムエタイのトップに紹介していただきました。

——WBCムエタイはMAとNJKFだけでやるというわけではないですね。

斉藤 違います。フリーや他団体の選手にもぜひ出たいです。我々だけで独占しようというわけではなく、どの選手がチャンピオンになっても上に行ける道を我々が作るつもりです。

——既存の団体で言うと、JNE、WORK、新日本キックボクシング協会、NKBとありますが、こちらにも声をかけるんですか。

橋本 かけます。実現するかは分かりませんが、呼びかけます。やりたいう選手はいらっしゃいます。

斉藤 WBCムエタイは我々にとっても魅力的だと思えます。権威のある団体ですから。アメリカ、オーストラリア、中国、ヨーロッパでも積極的にWBCムエタイの試合が行われていますから、日本でもしっかりとしたものを作りたい。そうすれば

人気も上がっていくと思います。ボクシングの世界のようなものを作りたいですね。元々、門戸を開いて我々以外の団体の選手にも参加していただきたかったんですが、返事を待っているとなかなか出発できなかったんで、去年はMAさんとNJKFで始めたんです。

——WBCムエタイに絡んでいくためには、JPMCに加盟しないといけないんですか？

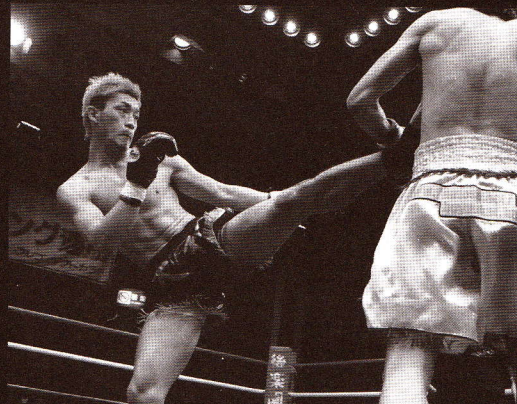
斉藤 いや、それはいいです。我々との関係はトライアングルというか、平等な立場で実行委員会の形になっています。ただ、海外とのパイプはJPMCが凄く太くて、WBCの中でも山根さんは顔が売れているだけではなく信頼されています。

橋本 凄くエネルギーが豊富な方なんです。

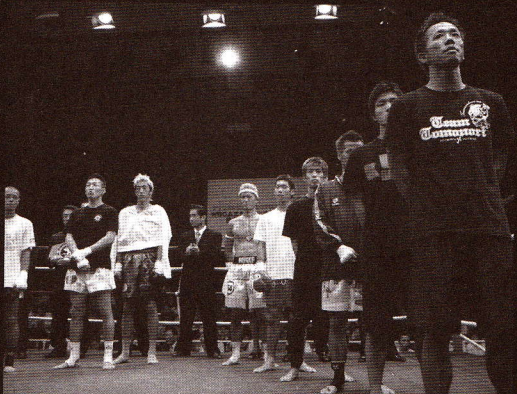
斉藤 海外に行った国崇や大和哲也に同行してくれて、いろんなケアもしてくれるんです。だから行った会長の選手も「あそこまでやっていただけのなんてありがたい。みんなあの人を誤解しているよ」と言っています。自分のためにやっているわけではなく、選手やみんなのために動いてくれている、と。

——WBCムエタイの他に、M-1とREBELLSがWPMF JAPANを本格的に日本に定着させようとしています。そちらの動きについてはどう思われていますか？

斉藤 上のタイトルを狙う他に、国内でもスター選手同士の争いがあった方が面白い。通常は違う活動をしていても、トップ選手同士の対抗戦を年に1回やろうと向こうから提案が来ているので、面白いことだと思います。具体的な話はまだしていませんが、そういうのもあります。



WBCムエタイ日本ライト級王者の大和哲也は、3月14日(現地時間)にアメリカでセンチャイ・ソー・キングスターと対戦するビッグチャンスを得た。



昨年に開催された統一日本王座決定トーナメントでは熱戦が繰り広げられた。今年は挑戦者決定トーナメントが行われ、王者が迎え撃つ形となる。

WBCムエタイルール日本チャンピオン一覧

- フライ級 大槻直輝(OGUNI/NJKF)
- バンタム級 TOMONORI(OGUNI/NJKF)
- スーパーバンタム級 国崇(拳之会/NJKF)
- フェザー級 心センチャイジム(センチャイムエタイ/NJKF)
- スーパーフェザー級 羅紗陀(キング/NJKF)
- ライト級 大和哲也(大和/NJKF)
- スーパーライト級 山本佑機(橋本道場/MA)
- ウェルター級 宮越宗一郎(拳粋会/NJKF)

橋本 WBCムエタイとWPMFが二天ヘルトくらいのものになったらいいですね。ラジヤダムナンとルンビニーのような。

齊藤 こっちが最高峰なんだって形にしてしまったら、狭くなってしまう。対戦相手も限られてくるし。ムエタイのタイトルという部分では同じなので、対抗戦は絶対に面白いと思います。ただ、キックボクサーってムエタイルールだけじゃなく、ガンガン打ち合うK-1ルール向きの選手もいるじゃないですか。そういう選手の活躍の場も必要だと思ってるので、ムエタイにこだわらすぎないようにしようとは思っています。選手の現役時代は短いですが、自分の目指せる方向に行けて、両方ともよくなるような形にしたいですね。

——WBCムエタイ以外は認めない、というわけではないんですね。

齊藤 やっぱお客さんあつての我々じゃないですか。お客さんが望む、喜ぶカードをどんどん提供したいですからね。

橋本 お互いまだ形が出来ていな

いから、一緒に切磋琢磨すればいいと思いますね。

——反目する必要はない、と。

齊藤 全然そんなつもりはありませぬ。この業界は仕切りをする必要はないと思っています。キックボクシングって本当に面白いと思っただけです。もっと広い目で見て、全ての団体が参加したら凄く面白い大会になるんではないかと。

橋本 キックボクサーもスポーツ選手じゃないですか。注目されなかつたら浮かばれないですよ。人生を投げ打って、痛い思いをしてやっっているんです。練習だって毎日3、4時間、週6日ですよ。それで日曜日は何をやっているかと言ったら他の選手のセコンドに就いたり。休みなんかありません。それを浮かばれるようにするのは……マスコミの使命です(笑)。

齊藤 我々もそうです。選手が輝ける場と、最終的にはキックの世界だけではなく、いろんなところに出て行ける名譽あるものを我々も作っていかねばいけません。

WBC Muay-thai vs WPMF

——藤原敏男会長が理事長に就任したJMDに関してはどう思っていますか？ NJKFとMAにも参加してもらいたいとの意向があるようですが。

齊藤 具体的にどういう活動をされるのかは聞いていないので、現時点では何とも言えません。ただ近々、会うことにはなっているので、お話を聞いてみたいと思います。

橋本 いいんじゃないですか。内容が分からないので、まずは聞かせてもらえれば。別に果船が来るわけではなく、面識のある人がやっていることなので、交流があってもおかしくないでしょう。

——WPMF側は完全にムエタイですが、MAとNJKFのスタンスとしてはムエタイをやるといっても、キックボクシングで打倒ムエタイを目指す形ですよ？

橋本 ウチは特にキックボクシングなんです。今年も3月から新人王トーナメントを始めるんですが、これはヒジが無いし首相撲も短いののでムエタイではないですね。選手を

育てるには日本でいきなりムエタイというのは厳しいと思うんですよ。よく御上が許可するなっていう過激なルールじゃないですか(笑)。

齊藤 我々は打倒ムエタイというものを、ムエタイをやって勝つという気持ちはないんです。キックボクシングでムエタイに挑んでいくし、K-1のようなスタイルにも挑んでいくというスタンスですね。ムエタイは確かにレベルが違いますが、今の日本は越えていける部分も絶対にあると思うんですよ。今は底辺が拡大しているじゃないですか。子供の数が増えています。昔はキックなんて言ったら、絶対に誰も親はやらせなかつたですよ(笑)。私なんてキックを始めたのは20歳の頃ですから。

橋本 私も20km離れた十道館の道場に通っていました(笑)。今は幼稚園の子が通ってきますからね。

齊藤 タイは一家の生活を支えるためとかハングリー精神をもつてやっています。日本からそれだけの選手が出てきてもおかしくないと思うんですよ。でも、ムエタイをやってタイ人に追いつくことでもなかなか出来るものじゃない。かつてそれを超えた人は、藤原さんにしてもムエタイをやったわけでもないですよ。ムエタイ独特のリズムを崩したために勝った。猪狩元秀さんにしても、ウチの向山鉄也副理事長もラモン・デッカーにしても、ムエタイでムエタイに勝ったわけではない。そういう勝ち方があるわけなんです。今は日本の底辺が広がっているから、素質のある人間が出てくると思うし、この業界がそれなりの地位にあれば、どんどんいい人材が集まってくる。K-1は若い人や子供たちに凄くいい影響があつて、あそこを目指そう

という人間が増えました。そういうものは我々の中でも作っていかねばいけない部分だと思っています。ムエタイルールでもそういう道があるんだよ、というのを。

——いま中・高校生の子どもたちがプロデビューする頃までには、WBCムエタイを確立させておきたいですね。

齊藤 そうですね。ムエタイ向きの子はそっちを目指せるように。そのためにはもっとWBCムエタイというものの価値を上に上げないといけない。選手がやっつけていけるだけの夢がないといけません。途中で諦めてしまつたのは先に何があるんだろって思うからでしょう。それに我々は元々、キックボクシングが好きなんですね(笑)。やっぱり未来に残していきたいですから。

橋本 団体が多すぎると批判されることもあるけれど、自分は興行がいっぱいあるのはいいことだと思っただけです。それを見て、憧れる子どもが増えるだろうから。見るだけの子どもいれば、僕もやりたいって子もいる。今では小学生の分際でキックを見に来る時代ですからね(笑)。

——夢を持たせるには、WBCムエタイの世界タイトルマッチを日本で実現させることが必要だと思つたのですが、ボクシング関係者の妨害があつて難しいようですね。

齊藤 WBCムエタイ本部はやりなさいと言ってくれているんですけど、どね。ただ、どうしても外せないところがある。そこをどうクリアするかです。でも、まだ具体的には言えませんが世界戦を日本で行つちよつとしたトリックがひとつあるんです。それを実現させるためには、まず日本人が世界のヘルトを獲つてくれるといひんすければね。